

多くの人が同意しない未来を作る ～慶應義塾大学の話題の公開授業 「SFCスピリッツの創造」に行ってきた～

太田智美 | 慶應義塾大学大学院

昨年、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスで公開授業「SFCスピリッツの創造」（全14回）が開催された。同授業は毎回異なる特別招聘教授を招いて行われ、その内容がTwitterのハッシュタグ「#SFCスピリッツ」でちょっとした話題になった。そのSFCスピリッツが、2020年度も開催することが決まった。そこで、昨年注目されたSFCスピリッツがどのような授業を行ったのかを、2019年5月14日に開催された第5回の授業をもとにレポートする。

講演者は、国立研究開発法人産業技術総合研究所主任研究員の江渡浩一郎さん（図-1）。講演のタイトルは「多くの人が同意しない未来を作る」。



■図-1 国立研究開発法人産業技術総合研究所主任研究員 江渡浩一郎さん

イベントプロデューサーやメディアアートの分野での自身の活動を交えながら話した。

多くの人が「同意しない」未来とは？

「多くの人が『同意しない』未来」とは何か。それは、江渡氏が提唱する「共創型イノベーション」のことだ。簡単に言うと、サービスやプロダクトを作るとき、「ユーザが生み出すイノベーションの可能性」を前提として全体を考えるとということ。その例として、クリプトン・フューチャー・メディア社のボーカル音源「初音ミク」を挙げた。

初音ミクはどうして生まれたか？

初音ミクが生まれた背景にはニコニコ動画の普及があったと、江渡氏は話す。

彼女が有名になった理由として多くの人が知っているのは「初音ミクの曲がニコニコ動画にたくさんアップされたため」という事実だろう。しかし、その関係はもっと深いものだという。

ご存じのように、ボーカル音源としては「初音ミク」が最初ではない。それよりずっと前（2004年11月5日）に「MEIKO」が発売されている。このMEIKOが、ニコニコ動画の登場により、急に売れ

始めたそうだ。その予兆から「ニコニコ動画に最適化されたものを作ればヒットするのではないか」と、名前やイラスト、キャラクターを作り込み誕生したのが「初音ミク」という。歌手ではなく声優に歌わせたのも、ニコニコ動画への最適化の1つ。これが当たり、大ヒットした。初音ミクは、まさにユーザが生み出すイノベーションの可能性から生まれた製品だと江渡氏は言う (図-2)。

初音ミクの事例から分かるように、江渡氏が提唱する「共創型イノベーション」は、「ユーザ・イノベーション」と「インクルーシブ・デザイン」から着想を得ている。

ユーザ・イノベーションの例で有名なのは、マウンテンバイクだ。マウンテンバイクは1970年代(アメリカ合衆国カリフォルニア州)に、「山で乗り回す自転車があったらカッコいいのでは?」との発想から、自転車とバイクの部品を組み合わせて乗り回していた人たちがいたことから始まったという。それをきっかけに広まり製品化したところ、爆発的にヒットした。

インクルーシブ・デザインは、従来デザインプロセスにかかわっていなかったような、極端なユーザを対象の人としてデザインすること。たとえば、車椅子をデザインするとする。一般的なやり方としては、デザイナーがデザインし、それを必要とする人に乗ってもらい、フィードバックを得て改善すると

いう方法がある。しかし、インクルーシブ・デザインでは、車椅子を必要とする人と毎日一緒に過ごし、同じ環境(空間)で開発することでデザインする。

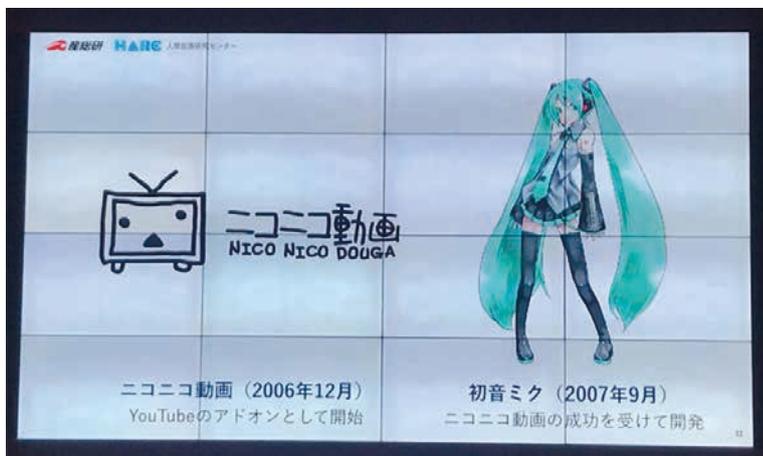
共創と協業の違い

「共創型イノベーション」の中で、最も重要なのが「共創」の概念だ。

ここで取り上げられたのが、1954年に公開された日本映画『七人の侍』である。この映画での大きなミッションは「盗賊から村を守る」こと。盗賊が押し入り、このままでは村が全滅してしまうという危機的な状況下で、どのような行動をするかという問いだ。

限られたリソースしかなく、でもなんとかして実現困難なことを達成したいとみんなが思ったときに「協調せずに行動する」手法が、この映画では描かれている。一人の司令塔となる人がいて、その人が指令した通りに従って動いて行くというツリー構造の命令系統ではなく、「この状況ではこう行動するのが最適だ」と各々がその場その場で全体を考えて行動する。これによって、それらがうまく噛み合ったときに、結果的に大きな目標を達成することができる。これが江渡氏の言う「共創」だ。

もう少し身近な例では、A社とB社が組んで新しいサービスをリリースするとする。このとき、「協業」というのは、どのような利益が得られるかといった見積もりがある程度できていて、A社とB社でどのように利益分配するかをあらかじめ決めてから始めるというもの。共創は、そもそも成功するかどうか分からない、成功したときにどのような利益が得られるのか分からないが、とにかく成功させたいという大きな目標を持って行動するときに使われる方法だという。この「大きな目標」のことを「共通善」と呼んでいる。共創には、



■図-2 授業資料

この共通善が必要不可欠なのだ。

多様性が、プロジェクト失敗の可能性を高める

少し話は変わるが、講義の中でとても興味深い話があった。特許と多様性を分析した Lee Fleming (2004年)の研究で、特許の金銭的価値とチームメンバーの多様性をグラフにした図がある(図-3)。この研究では、多様性が高まればプロジェクトが失敗する可能性が増加し、収入の平均値が低下したとの結果が出た。つまり、多様な能力を持った人が集まるより、ある特定の似たような能力を持った人が集まったチームの方が金銭的価値が高い特許が生まれる(特許から得られる収入が多い)という。これだけを聞くと、多様性を高めることは損のように思える。しかし、ここから面白い。

大ヒット(ブレイクスルー)は、ダイバーシティの高いところからしか生まれていないことが分かった。多様性が重要視されるようになったのは、そういったことからだ。今までなかったような飛び抜けた成功を生み出したいと思ったら、ユーザを巻き込

むようなダイバーシティが成功の可能性を広げる。ダイバーシティは常に成功するわけではないことを誤解なく理解しなければならないが、これは江渡氏の「共創型イノベーション」にもつながる話である。

授業にあった「仕掛け」

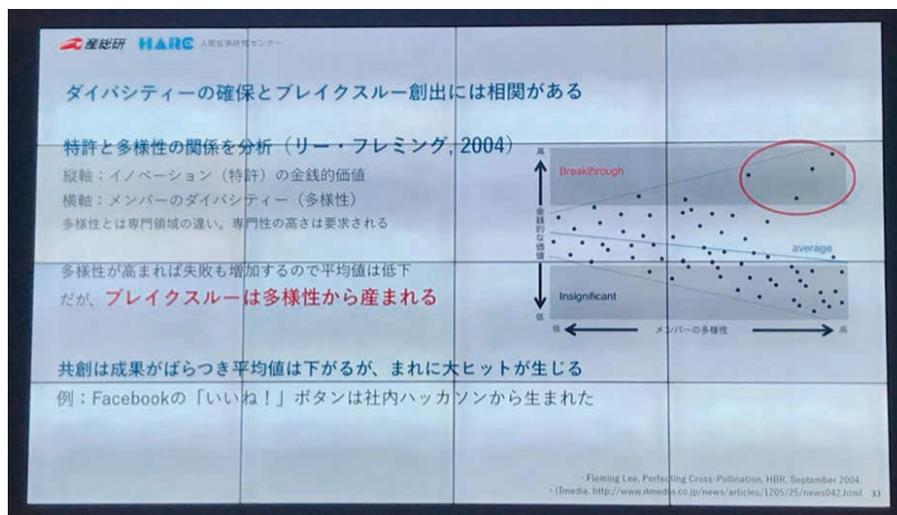
この公開授業で最も印象的だったのは、Twitter参加型の事前課題に、学生だけでなく周りの大人も広く積極的に参加していたことだ。江渡氏が言う「共創型イノベーション」が、ここにも仕掛けられているように感じた。

2020年度のSFCスピリッツ詳細はまだ未定だが、興味のある人はアンテナを張っておくといいかもしれない。

(2019年5月14日受付)

太田智美 tomomi.pepper@gmail.com

国立音楽大学卒業(音楽教育学科音楽教育専攻、音楽学研究コース修了)。現在、慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科後期博士課程2年。「ヒトとロボットの共生」の研究に従事。2014年11月～ロボット「Pepper」と生活をともにしている、ヒトとロボットの音楽ユニット「miracapsule」結成。



■図-3 特許と多様性の分析